

イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。(マタイによる福音書 18 章 22 節)

「あなたは人の失敗を何回まで許すことができますか?」、そう聞かれると、みなさんはどう答えるでしょうか。三回かなあ、一回も許したくないなあ、人によって違うかな。いろいろと思われるかもしれません。

ペトロはあるとき、イエス様にこう尋ねます。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか」。それに対してイエス様はこう答えます。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」と。7 の 70 倍とは、490。でもここでは、際限なく赦しなさいということです。何度でも「ごめんなさい」と言われたら赦してあげなさい。これがイエス様の言われた言葉だとしたら、なかなか守ることができない、そう思えてしまいます。

そしてイエス様は続けて、天の国のたとえを語られました。ある王のところに、1 万タラントという額の借金をしている家来が連れて来られました。しかし家来は、その借金を返済することができなかったので、王はその家来に、自分も妻も子も、持ち家も全部売って返済するように命じます。でもそれができない家来は、必死で王様に願うんですね。「待ってください、きっと全部返しますから」って。するとその王様は家来を憐れに思って、借金を返させるのを待った、ではないんです。その借金を帳消しにしてやったのです。つまりもう家来の借金はなくなった、チャラにしてもらったということです。

普通であれば、「じゃあ借金を少し減らしてやろう」とか、「また来年請求するからそのときには必ず支払うように」と言っただけではないでしょうか。それを、借入書をビリビリに破ってしまう。すべてを赦してしまったということです。

ここまで聞くと 1 万タラントという金額は、王様にとっては何でもないくらいの額だからそうしたのではないか、そう思うかもしれません。このタラントという単位ですが、1 タラントは 6000 デナリオンに相当する額です。当時、労働者の 1 日の賃金は、1 デナリオンでした。ということは 1 タラントを得ようと思ったら、6000 日間働かなければならない。家来の借金は 1 万タラントでした。ということは、6000 万日働いてやっと返せる額だったわけです。ちょっとピンとこないですね。6000 万日とは、16 万 4384 年間働き続けてようやく返せる額、もし 1 日の労働者の賃金を 1 万円だとすると、6000 億円もの借金をこの家来は背負っていたということになります。調べてみると、仙台市の予算と同じぐらいの額です。なぜその家来がそれだけの額の借金を背負ってしまったかは書かれていません。少しずつ少しずつ、たまりたまって、それが雪だるまのようにどんどん大きくなって、にっちもさっちもいなくなった。そういうことだったのでしょ。

さてイエス様は、この話をこのように語り始めておられました。「天の国は次のようにたとえられる」。つまりこの現実的にはありえない話は、天の国の話なのです。神さまの元では当たり前のように、このようなことがおこなわれているということです。

わたしたちはたくさんの借金を背負い、王の元に連れて来られた家来です。「いやいや、そんな借金してないですよ」、そう思うかもしれません。でもわたしたちが毎日の生活の中で、思いと

言葉とおこないによって犯す罪、それは膨れ上がっているのです。返そう、返そうと頑張っても、どうしても返せない、それどころか増えていく借金。神さまの前にいつも正しく歩むことのできないわたしたちを見て、神さまは憐れまれました。わたしたちが借金まみれのまま、神さまの前に立つことができない、その現実を憐れんだのです。

王様が家来の借金を帳消しにしたように、神さまはわたしたちの罪を帳消しにすることを望まれました。それが、イエス様の十字架なのです。神さまの憐れみによってイエス様は十字架の上で血を流され、その血によってわたしたちの罪は赦されたのです。

今日のイエス様の言葉は、ただただ何度でも赦しなさいということではありません。まずわたしたちが赦されたということ、を、しっかりと心に留めなさいということです。「わたしたちの罪をお赦しください。わたしたちも人を赦します」と主の祈りで唱えるように、まずわたしたちは、神さまに赦されたのだということが大事なのです。

イエス様はたとえを続けます。この莫大な借金を赦された家来は外に出ました。すると自分の仲間に出会います。その仲間は、自分に100デナリオンの借金をしていました。先ほど1デナリオンは一日分の賃金に相当すると言いました。一日の賃金が1万円であれば、100万円。決して小さな額ではありません。彼はその仲間に借金を返すように迫ります。そして「どうか待ってくれ。返すから」としきりに頼まれても承知せず、その仲間を牢に入れたまうのです。

その様子を見たその家来の他の仲間は心を痛め、王にそのことを伝えます。すると王は怒り、借金を帳消しにしてやった家来

を呼びつけ、借金を全部返してしまうまで、その家来を牢に入れた、そのようなお話です。

クリスチャンはいつでも、だれでも、どんなことでも赦さなければならない。そう思われている節があります。それが苦しくなることもあるわけです。しかし先ほども言いましたが、イエス様はここでただやみくもに「赦しなさい」と言われているのではありません。

まず、あなたが赦されている。神さまはその憐れみの中で、わたしたちを受け入れてくださった。だからあなたも、周りの人を赦して欲しい。そういうことなのです。100万円は決して少ない額ではありません。それを帳消しにするのはなかなか難しいのと同じように、わたしたちが周りの人たちを心から許すことはとても難しいことです。

でもそれ以上に難しいこと、これだけ神さまから離れてしまったわたしたち一人ひとりを神さまが愛し、受け入れてくださったことの方が難しいのです。それだけの愛にわたしたちは包まれているということを、まず心に留めなさいということなのだと思います。

だからわたしたちは、赦さなければならないという義務を負う共同体ではなく、神さまに赦された喜びを分かち合う共同体でありたいと思います。その喜びがあって初めて、周りの人と手を取り合い歩むことができる。その根っこのところを大切にしていければと思います。

神さまの愛がすべての人に注がれ、となりにいる人に優しくなれますように。お祈りを続けてまいりましょう。